



館長だより

山形県産業科学館

令和 7 年 8 月 3 1 日(日)

発行 館長 加藤 智 一

子どもが歌うには、ちょっと怖い歌詞

先日、朝日新聞のコラムを読んでおりましたら、新型コロナウイルスに関する情報が書かれてありました。なんでもこの度の新型コロナの俗称は「ニンバス」。正式?には、「NB. 1. 8. 1」というのだそうですが、なぜ「ニンバス」と呼ばれるようになったかという、科学的というよりも、記憶に残りやすく、偏見を生まない愛称をつける慣習に基づいているのだそうです。確かに「NB. 1. 8. 1」では専門的すぎて、一般の人々やメディアにとって扱いづらい。そこで、より親しみやすい名前ということで、進化生物学者 T. Ryan Gregory 教授が、感染力が雲のように広がる様子や、免疫を覆い隠す性質を象徴しているという意味で、ラテン語で「雨雲」や「聖者の後光」を意味する、「ニンバス」と名付けたそうです。「ニンバス」は「ハリー・ポッター」に登場する魔法のホウキ「ニンバス 2000」としても知られており、記憶に残りやすく、話題性も高いということらしいです。

ところでこの「ニンバス株」、感染力が高く、ACE2 受容体への結合力が強い。さらに免疫逃避能力が高く、過去の感染やワクチンによる抗体の効果を 30~40% 低下させる可能性があるのだそうです。また、のどの痛みが半端なく、「カミソリを飲み込むようだ」とか「ガラスを飲んだような」とか比喻されておまして、コラムにもありましたように、子どもの頃に歌った約束の絶対性を心に留めるフレーズ、「指切りげんまん、嘘ついたら針千本飲ます」を思い起こさずにいられません。ちなみに「指切り」という言葉の背景には、江戸時代の遊郭文化が関係しているとも言われており、遊女が愛情の証として小指を切って渡すという風習があって、それが「指切り」の由来になったという説もあります。また「げんまん(拳万)」とは、拳骨 1 万回のことだそうで、これはこれで、かなり怖いはなし。

怖いといえば、江戸の昔から、日本の伝統的な子守歌には、現代の感覚では「残酷」や「怖い」と感じられる歌詞が含まれているものが少なくありません。これは、子守歌が単なる寝かしつけの歌ではなく、奉公人や親の苦労、社会背景、時には子どもへの戒めや皮肉を込めた表現だったからだとされています。例えば「島原の子守唄(長崎県)」では、歌詞の一部に「鬼の池 九助どんの 連れんこらるバイ」

という表現があり、寝ない子を“鬼の池にいる怖い人に連れて行かれる”と脅していますし、実際に島原では、子どもが外国に売られることもあったという歴史的背景があるそうです。また、「竹馬よいち(滋賀県)」では、「賽の河原の橋の下には怖い蛇がいる」と歌い、死後の世界に連れて行くようなイメージで子どもを脅しています。そう言うおきながら、最後に「うそじゃげな(嘘だよ)」とフォローはするものの、全体としては不気味な雰囲気は拭えません。さらに、「高知の子守唄」では、「早く寝ないと大根のように刻むぞ」といった、赤ちゃんへの憎しみすら感じる表現があり、奉公人が自分の辛い境遇を歌に込めた、悲しみの歌でもあるようです。最も有名な「五木の子守唄(熊本県)」にも、一見穏やかなメロディの中に、「おどみや島原のナシの木育ちよ」という歌詞があり、奉公人として売られた少女の境遇が反映されています。また、「オロロンバイ」という言葉にも、悲しみや諦めが込められている気がします。

では、なぜ残酷な歌詞が多いのでしょうか?そこには奉公人の境遇や、貧困、口減らし、子どもの売買といった当時の社会的背景があるのだと思います。子守歌は専ら、親ではなく奉公人(女中)が歌うことが多く、彼女たちの辛さや不満が歌詞に込められました。手っ取り早くおとなしく寝かし付けるには、鬼や幽霊などの存在を持ち出して、怖がらせることが一般的だったのでしょね。

